

## 研究紹介 大和田浩子

### 指定障害者支援施設における入所者の栄養状態及び栄養マネジメントの実施状況：日本における全国調査

Nutritional status and nutritional management implementation for residents with disabilities in welfare facilities: A nationwide survey in Japan

※ 本研究成果は、2022年10月に、国際学術誌「Journal of Nutritional Science and Vitaminology 68 巻5号」に掲載されました。

障害者が自立して快適な日常生活を営み、尊厳ある自己実現をめざすためには、一人ひとりの栄養健康状態の維持や食生活の質の向上を図ることが不可欠です。そこで、日本では、障害者支援施設（以下「施設」という。）に入所する障害者の栄養ケアの改善を図るため、施設における栄養ケア・マネジメントの実施を評価する制度として、栄養マネジメント加算（以下「NM加算」という。）が、2009年4月にスタートしましたが、2014年時点においてNM加算算定率（NM加算を算定している施設の割合）は37.4%と低い状況にありました。また、「施設入所者の栄養状態、摂食・嚥下機能及び食行動の実態」、「2014年以降の施設におけるNM加算及び経口維持加算の算定状況並びに加算導入の阻害要因」を全国規模で検討した研究もありませんでした。

そこで、2018年8月、「施設入所者の栄養状態、摂食・嚥下機能及び食行動の実態を把握すること」及び「施設におけるNM加算及び経口維持加算の算定状況並びに加算導入の阻害要因を明らかにすること」を目的に、全国の施設2,510箇所に対して、「施設における栄養ケア・マネジメント（NCM）の実施状況に関する調査」（無記名式質問紙票）への回答を郵送法により依頼し、1,538施設（61.3%）から有効回答を得ることができました。

その結果、(1)全入所者（80,322人）のうち、①「やせ（BMI：18.5 kg/m<sup>2</sup>未満）の者」が16.9%、「肥満（BMI：25.0 kg/m<sup>2</sup>以上）の者」が14.5%存在し、栄養状態に問題がある者が全体の約3割を占めていること、②「食形態の調整を行っている者」が38.9%、「とろみ剤を使用している者」が10.8%存在し、摂食・嚥下機能に問題がある者が多いこと、(2) 1,538施設ではその多くが、「早食い・丸呑み」（90.2%）、「偏食」（76.5%）、「食べこぼし」（63.3%）を入所者の食行動の問題として捉えており、食行動に問題がある入所者が多数存在すること、等を明らかにすることができました。

また、NM加算を算定している施設は1,538施設中723施設（47.0%）、経口維持加算を算定している施設は54施設（3.5%）でした。NM加算を算定している施設では、栄養スクリーニング、栄養アセスメント、栄養ケア計画の作成、モニタリング、カンファレンス、栄養ケアの評価、多職種による食事の観察などNCMを行う上で必要な項目について、NM加算を算定していない施設よりも実施割合が高く、入所者に対してきめ細やかなケアが実施されていることを明らかにすることができました。なお、施設においてNM加算を導入することができない要因は、「NCMの時間が取れない」が30.2%で最も高く、次いで「管理栄養士が配置されていない」が29.3%、「嚥下機能の評価が難しい」が24.1%でした。

本研究は、これまで明確にされていなかった全国の施設における入所者の栄養状態や食に関する問題の実態、施設のNM加算算定率や加算導入の阻害要因を把握した貴重な研究であり、今後、施設のNMのあり方等をさらに改善してくための基礎資料として極めて重要な役割を果たすものです。

本研究は、平成 30（2018）年度 公益社団法人 日本栄養士会政策事業「障害者支援施設及び福祉型障害児入所施設における栄養ケア・マネジメントのあり方に関する検討事業」の一環として実施しました。